

第二回「文芸思潮」短歌賞 発表

第二回「文芸思潮」短歌賞に御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。今回は前回に比して約二倍——総数一一四名二二六首が集まりました。当初の目的である日本の伝統に則った叙情歌としての短歌、自然と人生とに和した詠嘆精神を宿した作品をより充実した形で求めることができました。厚く御礼申し上げます。

昨今の日本の現代短歌は荒廃のうちにあり、正岡子規が提唱した近代短歌から離れて言葉や観念の遊びになっている状況にあります。これに歯止めをかけるべく、この短歌賞を始めましたが、今回もそれに応じてくれた方々に、短歌精神の生き生きとした息吹を感じることができました。

一月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれ、それらを通過した作品を対象に、四月三十日、福田淑子、五十嵐勉の選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

第三回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。
〔「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮〕

優秀賞

安野たかし

(山口県山口市)

華央子

(北海道茅部郡)

萱島 享

(大分県大分市)

石井和子

(和歌山県西牟婁郡)

日高千佳子

(東京都目黒区)

田和 明

(神奈川県小田原市)

最優秀賞

第二回「文芸思潮」短歌賞

船岡房公

(滋賀県大津市)

辻花ひる

(大阪府松原市)

奨励賞

新井巳喜雄

(埼玉県児玉郡)

廣島佑亮

(愛知県北名古屋市)

多治川紀子

(大阪府大阪市)

川野忠夫

(群馬県伊勢崎市)

緋沙

(沖縄県八重山郡)

白藤巳玲

(埼玉県本庄市)

芍薬

(千葉県千葉市)

森山緋紗

(神奈川県横浜市)

河野 計

(大分県大分市)

住吉和歌子

(北海道札幌市)

選評

叙景と調べ

五十嵐 勉

第二回の文芸思潮短歌賞は第一回の倍以上の一一四人の方々から応募をいただいた。倍となれば満足のいく応募数かと言われると、まだまだ足りない気がする。現代の短歌の現状を見ると、これでいいのかと不満を抱いている人もっとたくさんいるのではないかと思うし、隠れた名歌、秀歌も多いと思うからである。しかしとにかく増えて、それに比例して全体的な質も上がっている感触は喜ばしいことだった。

また昨年応募してくれた方々が、今年も持続的に寄せてきてくれるのもうれしいことで、こうした傾向が何かを生みだしていく発展の気配に繋がっているのを覚えた。

最優秀賞は二人出た。そのうちの一人、辻花ひろ氏は昨年の優秀賞の受賞者で、継続の成果を体現している。しかも昨年よりもいっそう氏の持ち味が生かされて、命を見つめていとおしむ優しい眼差しが深く漲っていて、心の洗われる歌になっている。

た韻律が響いている。

目を閉じて風の音きく葦の原つがな無きこそさきはひなれと
目を閉じながら風の音を聞くことによつていっそう鮮やかに葦の原の情景が浮かび上がってくる手腕は、鍛錬を積んだ技量を感じさせる。「さきはひ」は万葉集に出てくる「幸い」の意味の言葉で、自然に流れ出てくるところにも作歌の蓄積が反映されている。

朝の陽を浴びて草食む牛の背に遠き山々重なりて見ゆ
日高千佳子氏の作品も牛の背と山々の姿が重なるところに大きなものの存在が浮かび上がる秀歌となっていて、生かされている牛や自分たちが感じられる。

落日の光を透すきて芒すすきの穂かがやく原にハモニカ聞こゆ
八月は哀しき雲の立ちのぼり母を呼ぶ声ことも呼ぶ声

優秀賞の田和明氏の歌と安野たかし氏の歌は叙景に加えて懐かしさや親子の情愛の高まりがある。そこに感情の旋律が麗しく流れている。ただ後者は体現止めが余韻を切り

点滴の針刺さりたる右手を撫なつ

われ支へくれし百年もとせちかく

また今回は歌の領域がひろがって、雄大な自然を描くものも少なくなかった。船岡房公氏の歌は中でも際立つた結晶度を見せている。

あかときの雨の名残りの道ゆけば遥かに霧きらふ叡山えいざんの嶺

船岡氏は作歌キャリアも長いらしく、その言葉には古典の素養も豊かに綾織られ、隙のない緊密な流れは見事である。格調の高さも感じられるが、逆に古典の教養が現代を隔てる壁を生じている面もある。

叙景に込める人生の感慨は、作品として他にもかなり多く、また優れたものがあり、それが今回の特色となっていた。

石井和子氏の歌も、鉄路の果てと流れ星がうまく協奏し、人生の哀感を醸している。

軋ゆむ日もありし鉄路は終着の故郷はるかに流れ星降る

また萱島たか享氏の作品も古典に根差した叙景に、落ち着い

捨ててしまっているのが惜しまれる。

叙景のオーソドックスな形から外れた歌も今回いくつかいいものがあり、それは必ずしも伝統短歌に与しないが、魅力は湛えているのであって、短歌が別な可能性としても開花していることはよく示している。伝統はまた伝統以外のものも働かかけによつていっそう豊かに膨らんでいくものでもあるだろう。優秀賞の華央子氏の作品、また奨励賞の森山緋紗氏の作品には鋭利な言葉の中に深層を穿とうとする造形が感じられる。

風荒ぶ内浦湾の断崖の鷹の眼光一点を射す

盲目の馬が嘶なく冬の果て海黒々と祈りをはらむ

奨励賞の中にはリアリズムとして迫真力のある作品もあり、白藤巳玲氏の歌はその筆頭に挙げられる。

ときおりのドライアイスの軋ゆむ音今宵を父の亡骸と居る

また昨年引き続き、新井巳喜雄氏は同じテーマで過疎地の荒涼を伝えてきてくれたし、川野忠夫氏の人間の親しさの中に込められた優しい心の壁を細やかに表して、温めてくれた。

月光に照らされし家冴え冴えと谷間の村は無人となりて
ルビ降りて孫にやさしき文字書けば
いつしか人を許しておりぬ

今回多くの短歌に接して感じたことは、新聞や雑誌の現代短歌の潤いのない、深みや趣を失った枯れ草の群れのよ
うな流行短歌とは別に、しっかりと自然や生活に根差した
作歌営為が日本には存在するということだった。またそれ
らの歌壇に見られる調べのなさは、低劣な音楽を聴かされ
る不快感があったが、寄せられた作品の中には、優れた音
楽性を感したのも少なからずあった。音楽だけに偏って
いるものもあって、それは最後に残らなかつたが、やはり
短歌は調べの美しさも備わっていて、その流れで歌い上げ
る高まりが命の息づきを響かせてくれるものであつてほし
い。

松の葉の葉毎に結ぶ白露の

置きてはこぼれこぼれては置く

正岡子規のこの歌の調べをもう一度味わっていたたくこ
とを結語としたい。

自然と向き合う息遣い

福田淑子

今回の短歌賞最優秀賞の二作品は、どちらもしみじみと
した人生の実感に裏打ちされた力強い骨太の歌である。

生き続けるということは、喜びと苦渋のないまぜになつ
た言いようのない感情を内に秘めながら、自然の成り行き
として最期の時を迎えるということである。歌はそのよう
な時間をじっくりと熟成させて、三十一文字の韻律の中に
閉じ込める。それゆえ、言葉足らず、または思い多くして
定型に収まらずということが、ままある、というのも、こ
の韻律の「ままならぬ」ところである。

大賞や優秀賞の中には、旧かな遣いと新かな遣いが混在
していて、歌の仕上がりとして危ういという作品もあつた
が、選考委員長の五十嵐氏の、「それはこちらで修正すれ
ばいいのです。形の出来不出来より、思いの深さ、歌意の
実を採りましょう」というおらかな、それでいて眼光鋭
いひとことに、型の整った作品に拘るといふ軟弱な姿勢を
改めた。しかし、それぞれの作者の貴重な経験や思いを私
たちがすべて間違いなく受け止められるとも限らない。そ
れぞれの歌の言葉の連なりからじっくりと伝わってくるも
のを、おのれの体験と照応させながらしみじみと湧き上が



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流瀆の島」で群像新人
長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・
NTTプリンテック主催第1
回インターネット文芸新人賞
最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学
賞受賞
15より歌人越山しづかの勧め
で短歌誌「美知思波」入会

佳作

ゴルビー長田	米長 保	松下二三夫
柀 二郎	佐藤優羽	日野正美
東家芳寛	風間洋平	内山淨子
坂井 傑	樋口敏子	江田峰子
風森漣翠	山水文絵	海神瑠珂
岩谷隆司	松本達雄	石吾弓子
朝生その子	萩原房子	原水
野月真人	安藤直彦	下村きよ子
尾内甲太郎	徳永逸夫	石田正流号室
愛蘭希	葵井禎子	紫ことは
島田和生	山本 明	野中 暁
瀬戸内 光	上久保みどり	真岡甚一
岡崎佐紅	藤原 靖	大川智子
関口智子	夏井寛治	

ってくる余韻を味わいつつ慎重に選ばせていただいた。と
はいえ歌の解釈には正解がないことは言うまでもない。

あかとき雨の名残りの道ゆけば遥かに霧ふ叡山の嶺
船岡房公

目に映る自然がしつとりと丁寧に叙景されている。私た
ちは大きな自然の中に生かされているということを変更し
思い知る力強さがある。パーチャルな情報の渦にのみ込ま
れつつあるこの時代にあつて、身体の五感すべてを開い
て、大自然と向き合い包まれていく人の息遣いや自然に溶
け込んでいく姿が伝わってくる。「あかときの雨の名残
の」の景も韻も美しい。自然には人を癒やす力がある。

点滴の針刺さりたる右手を撫つ

われ支へくれし百年ちかく

辻花ひろ

「点滴の針刺さりたる右手を撫つ」という表現に凝縮され
た人生の時間、その瘦せ枯れた心もとなし身体への慈しみ
やいとおしさには、自己愛を超えてたくましく、人間が生
き続けるということの営みを神々しくさえ感じさせてくれ
るものがある。酸いも甘いも乗り越えて百年近く生き続け
るといふことは、それだけで見事である。

優秀賞の作品は、それぞれの歌がどれも自然に照応させ

て己の立ち姿を浮かび上がらせている。作者の日々の営み
までは織り込まれていないが、切り取られた情景と、その
自然の中の身の置き方で人柄が伝わってくるということ
に、心惹かれる。「命あるすべてのものはひたすらに華な
るときを楽しむ」ことに思いを寄せ、自らにもそれを言い
聞かせている安野さん、「風荒ぶ」中で「鷹の眼光」を見
つめる華央子さん、「目を閉じて葦の原の風の声」を聴こ
うとする菅嶋さん、「鉄道の終着駅の故郷の星」を思う石
井さん、「草食む牛の背」の向こうに遠き山を臨む町田さ
ん、「光る芒の原とハモニカ」のハーモニーに耳を傾ける
田和さん、そのような自然がこの国のどこかにあるとい
うことを思い出しつつ、それぞれの方々の人生や日常を思
やってみる。誰しもが目にしてはいる何気ない風景を感慨深
く歌い上げていることで、読む側も何か嬉しいような有難
いような豊かな思いになる。いつの間にか、その風景に身
を置きながら、さまざまな情感を歌から汲み取っている。
素材で力強い三十一文字が健在であることを見出して幸
であった。

奨励賞の歌をいくつか取り上げてみたい。

偽りの我が告白を疑はぬ瘦せたる友は降る雪の中

廣島佑亮

舞台装置がしっかりと設定されていて、何かドラママツ

懸命に生きていけば、時には耐え難い苦難や孤独に打ちひ
しがれることもある。そんな時に大自然や何気ない事柄
に癒されている「私」をつかみ取るのも歌のことばであ
る。そして、思いと形がしつくりとはまるということが、
ひとつの歌という形式の出会いである。溢れる思いを詠
み込んだ後、他者のまなざしになって、客観的な目で歌を
読み返して一人の読者として批評してみる。優れた批評者
であろうとすることは歌を練り上げていく力となる。特に
「てにをは」や旧かな、新かなについては仕上げの段階で
さらに推敲をかさねていただけたらと残念に思う作品が散
見された。次回を期待したい。

ク。この光景に心当たりがあると思うのは、映画や劇など
の一場面としての記憶によるのか、自分の人生の記憶の中
の心象風景に触れるからなのか。謎めいてはいるが、雪の
降る静寂の中に人を立ち止まらせる。長く生きていけば、
良心に痛みを伴う出来事にも遭遇する。生き残るとい
うことは、どこか悲痛であることを思い知らされる歌である。

ルビ振りて孫にやさしき文書けば

いつしか人を許してをりぬ

川野忠夫

これまで他者の心ない所業や言葉の数々が心の底に蓄積
している。時折、それがよみがえり、年を重ねてもそれら
を恨む思いに苦しむ。すると己の恥ずべき所業も思い出さ
れて、後悔の念に苛まれる。そんな時は「罪を憎んで人を
憎まず」という諺が空しいお題目となり、心が粟立つ。一
瞬でもこの歌に詠まれたような心境になれたら有難いこと
だ。そのように思える瞬間を逃さず切り取ってきた人間力
を感じさせる歌である。ただ、孫という存在に縁のない人
にとつては、あまりピンとこないかもしれないという危惧
もある。応募されたどの作品にも、それぞれの人生や、
様々な魅力があつて興味を引かれた。

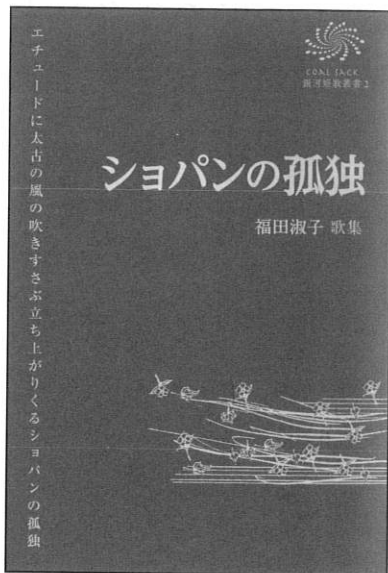
歌を詠むということには、もろもろの煩悶を排出する
「排悶」という力がある。こころもとなない「私」を抱えて



福田淑子
ふくだ よしこ
1950 東京都生まれ
2003 短歌評論「馥郁たる叛逆—斉藤史
論」で第70号「文芸埼玉」評論部門入選
2007 「孤独なる球体」で第8回大西民子
賞受賞
2018 歌集「ショパンの孤独」で第13回
日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門優秀賞
著作に「文学は教育を変えられるか」(文
学教育評論集、2019)等。短歌誌「波濤」
を経て、現在短歌同人誌「まろにゑ」・現
代短歌〔舟の会〕、俳句同人誌「花林花」
所属
鉄幹晶子全集刊行会元編集委員

入選

- | | |
|-------|-------|
| 山野さくら | 外山寛子 |
| 田浦チサ子 | 小林捷恵 |
| 平尾三枝子 | 榎本遼太 |
| 独活山強実 | 石田真一 |
| 溝口悦子 | 原比呂子 |
| 近藤國法 | 矢尾板素子 |
| 愛未里 | 田中妙子 |
| 川村 栄 | 木蓮 |
| 杏藤 伶 | 柳亭亨清三 |
| 前田達生 | 高橋 良 |



福田淑子歌集「ショパンの孤独」

第二回「文芸思潮」短歌賞

最優秀賞



辻花ひろ

点滴の針刺さりたる右手を撫めづ

われ支ももへくれし百年近とせく

受賞の言葉

九六才の誕生日を目前に、私の人生に再度華を添えて下さった先生方に何とお礼申してよいやら……。省みますと十才にして母、姉弟、父に捨てられ、私は小学校中退。二十才で終戦、一億総飢餓の三年後に結婚。後年その夫に暴力を振るわれることに。そんなある日、日蓮正宗に入信。九五才にして文芸思潮の荣誉に恵まれました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

辻花ひろ

つじはな ひろ

1925 (大正 14 年) 大阪市浪速区生まれ 96 歳
建築設計業の父のもと、虚弱児として生まれる
1935 (昭和 10 年) 大阪市浪速区芦原小学校中退
桜川電話局に交換手として就職
のちに朝鮮電工株式会社に転職するも、終戦により解散
ビルマ帰還兵の夫との間に娘を出産
大阪文学学校 7 年在籍
10 年前に夫死去、現在娘と同居

あかときの雨の名残の道ゆけば遙かに霧きらふ叡山えいざんの嶺

受賞の言葉

五月のある日、最優秀賞に選ばれたという報せを電話で受け、本当に驚きました。選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。



船岡房公

リタイア後、知人から俳句同好会に誘われたのを機に、地元の市民短歌・俳句大会に応募したところ、短歌でいきなり特選を受賞。このビギナーズ・ラックをきっかけに、京都にあるNHK文化センターの短歌教室の門を叩いたのが、今から二年半前の秋のことです。教室の先生がたま

たま「山繭」という結社に属し、文語定型や大和言葉で詠うことを重んじている方ですので、伝統的な自然詠、叙情歌等の詠み方の講義も多く、斎藤茂吉や長塚節あたりの歌を読むことをよく薦められます。こうした私の習作環境と「文芸思潮」短歌賞の募集の趣旨が通底していたことが、運よく受賞につながったのかもしれない。今回の受賞を励みに、さらに精進を重ねたいと思います。誠にありがとうございました。

船岡房公

ふなおか ふさひろ

1953 愛媛県宇和島市生まれ 立命館大学法学部卒業
京都の制作会社で長年、雑誌の取材・執筆・編集に従事
同社の代表を務めた後、退社し、現在はフリーランスのライター兼エディターに 滋賀県大津市在住 68 歳
2019 秋より、「塔」滋賀歌会参加
2020 第 70 回滋賀県文学祭 短歌部門 特選 (2 年連続)
同年 朝日新聞社主催「八月の歌 2020」優秀賞
2021 第 22 回 NHK 全国大会 / 近藤芳美賞選者奨励賞

優秀賞

軌む日もありし 鉄路は終着の故郷はるかに流れ星降る



石井和子

受賞の言葉

私は昨秋米寿を迎えました。
お送りいただいた御誌の短歌への論説に甚く共感し
応募。はからずも優秀賞に驚きと感謝と歌への回顧に
ひたるのみでした。

私は歌の韻律と日本語の醸す多面性や重層的な意味
からの想像の可能性に惹かれ、また波乱の日常の反世
界としての短歌に憧れながら、張り詰めていても、密
かに漏れる女性の愛しみや喜びを歌い継ぐ希望を、老
いながら戴いたことに厚く感謝申し上げるばかりで
す。

石井和子

いしい かずこ

- 1932 高知県生まれ
- 40 高知県立第一高等女学校入学／卒業
- 63 短歌結社「原型」入会
第1回原型賞受賞
角川「短歌」二十首競詠一席受賞
- 81 歌集「花絡」出版
- 90 短歌結社「登花歌人会」結成
- 2004 和歌山県歌人クラブ会長任期2年
歌集「幻有」出版
日本歌人クラブ関西地区委員
「登花歌人会」主宰 南紀短歌連盟会長
産経新聞和歌山短歌選者「あしかび」同人

目を閉じて風の声きく葦の原恙無きこそさきはひなれと



萱島 享

受賞の言葉

籠もり居の中、思いがけないおしらせをいただきま
した。驚きの高揚感に元気が戻ったように思えます。
ありがとうございます。

短歌との出会いは遅いものでしたが、月二回の勉強
会は楽しく、言葉のもつ面白さに魅了されました。今
まで続けられたのも、指導して下さる日野正美先生と
お仲間のお蔭と感謝いたしております。作歌は近くを
流れる大分川での散策によって生まれることが多いよ
うです。この先も短歌を携えて歩みゆくつもりです。

萱島 享

かやじま たか

1938 年生まれ
大分市在住
専業主婦
「小徑」短歌会 はなみずき所属

優秀賞

朝の陽を浴びて草食む牛の背に遠き山々重なりて見ゆ

受賞の言葉

今回の受賞、とても嬉しいですが、本当に有り難うございます。亡き父は、立命館大学を卒業後、武蔵野美術大学で学び、「反戦平和」をテーマとした画家として絵筆を揮っていました。同時に、多くの作品を描くきっかけとして、短歌を詠んでいました。「芸術は、絵画にせよ、短歌にせよ、感覚を鋭く磨いて美を追求することに於いては、共通したものがあある」という言葉が忘れられません。だから、私は常に新しい事にチャレンジし、ポジティブな感覚を持つようにはしています。私に短歌を教えてくれた父も、大好きな短歌で今回、受賞できた事を、天国でもきっと誉めてくれると思います。



父・日高浩耀（本名/日高俊夫・享年七五歳）と私

日高千佳子

日高千佳子
(町田千佳子) ひだか ちかこ
京都女子大卒業
編集社に勤務後、声優学校、演劇の事務所に通い、芸能や主に声優の仕事に従事
専業主婦

八月は哀しき雲の立ちのぼり母を呼ぶ声こども呼ぶ声



安野たかし

受賞の言葉

第二回「文芸思潮」短歌賞優秀賞に選んでいただきましたことを、大変嬉しく、非常に光栄に存じます。選考委員の方々ならびに、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。初孫の誕生をきっかけに短歌をはじめ、平成元年六月から二年間だけでしたが、塔短歌会で学ばせていただいたことが、受賞につながったものと感じております。「八月は……」は昨夏、自分なりの鎮魂のつもりで詠みました。これを励みに、また詠み続けたいと思います。

安野たかし
やすの たかし
1959年島根県益田市生まれ
山口大学医学部卒業
現在、山口県山口市在住
2018年より短歌を始める
2019年6月塔短歌会入会、2021年6月
塔短歌会退会

優秀賞

風荒ぶ内浦湾の断崖の鷹の眼光一点を射す



華央子

受賞の言葉

この度、短歌賞優秀賞を賜りとても嬉しく思います。選考委員の皆様へ感謝申し上げます。

五、六年前より短歌や俳句に興味を持ちまして、俳句は町の句会に参加しておりますが、短歌は個人で作歌に励んでおります。

北海道の住人として、この地の季節ごとの自然のすばらしさや変化を書き留めたいという気持ちで、私の作歌の礎です。

今回の受賞を励みとして、尚研鑽を積んで参りたいと思います。

かおこ

華央子

1954年生まれ
東京にて、夫、子ども二人と、夫の両親との二世帯で暮らしていたが、両親の他界、そして子ども達の独立を機に15年あまり前、北海道へ移住した
この地で、詩、エッセイ、短歌、俳句に励む
詩集二冊を個人で作製

落日の光を透きて芒の穂かがやく原にハモニカ聞こゆ

田和明

受賞の言葉

第二回「文芸思潮」短歌賞の優秀賞に驚いています。今まで新聞をはじめ投稿に応募したことがありません。コロナ禍の中で外に出られず、ネットでの生活が続ぎ、気まぐれに参加したのに優秀賞に選ばれ、恥ずかしさでいっぱいです。短歌は日々感じたことを三十一文字に集約していく過程を楽しんでいくものと考え、日記の代わりに頭の体操として、続けていきたいです。ありがとうございます。

だわ あきら

田和明

1948年生まれ
35歳の時に職場で飲み友だちから、短歌のサークルに誘われたのが始まり
2010年に退職をし、神奈川大学の講座で短歌を勉強する
2012年より「八雁」に入会、現在に至る

奨励賞

ときおりのドライアイスの軋む音今宵を父の亡骸と居る

白藤巳玲

しらふじ みれい
1957 東京生まれ
「サラダ記念日」に触
発されて短歌を始める
以後、現在に至るま
で、地元の短歌サーク
ルにて作歌活動を続け
ている



多治川紀子

たじかわ のりこ
1957 年大阪市生まれ
奈良女子大学文学部英
語・英米文学科卒
2018 年通信添削受講
をきっかけに短歌を始
める
同時にカルチャーセン
ターの短歌教室でも歌
を読むことそして詠む
ことを学びながら現在
に至る

たまきはる命はじける幼子を抱けば鼓動の強く伝わる



森山緋紗

もりやま ひさ
1982 年東京生まれ
神奈川県在住
2019 年「塔」短歌会入会
同年歌人集団「かばん」
入会
「月歩」同人
第11回塔新人賞受賞

盲目の馬が嘶く冬の果て海黒々と祈りをはらむ



河野 計

かわの はかる
1948 年大分県生まれ
定年退職後、大分市
にある短歌クラブ
「小徑」の主宰者日野
正美氏に師事

ふるさとの人影もなきバス停に一日二便の時刻表見る

奨励賞



住吉和歌子

すみよし わかこ
1982年生まれ
北海道札幌市出身
藤女子大学文学部卒業
2017年より作歌を開始
無所属
雑誌や新聞に投稿を続けている

鈴なりの林檎畑に灯されたひとつひとつのいのちの明かり



新井巳喜雄

あらい みきお
1953 埼玉県生まれ
1978 立正大学大学院文学研究科修士課程終了
長野俊英高校国語教師
定年退職後、作歌活動に専念
主著『井上靖 老いと死を見据えて』（近代文芸社）『私の上に降る雪は』（ほおずき書籍）『井上靖と信州』（新風舎）
第16回『私からあなたへの万葉集』大賞受賞

月光に照らされし家冴え冴えと谷間の村は無人と成りて

第2回「文芸思潮」 短歌賞



川野忠夫

かわの ただお
1947 東京生まれ
66 都立北豊島工業高校卒業
66 (株) 埼玉薬品入社
2013 定年退職
現在に至る

ルビ振りて孫にやさしき文書けばいつしか人を許しておりぬ



芍薬

しゃくやく
1979年千葉県生まれ
慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科卒
日本IBM、特許翻訳関連業を経て主婦
2018年より作歌開始、無所属で新聞雑誌などへの投稿を主に活動中
2020年7月和歌の浦短歌賞大賞受賞など
趣味はヨガ

消えてしまふことの優しさくちびるを窓の結露に押し当ててゐる

第3回 文芸思潮 短歌賞 作品募集

文芸思潮では、伝統短歌に基づいた清新な短歌作品を募集します。現代流行の短歌は志操が荒れ、真の叙情が喪失されています。日本の自然の中で育まれる感情と心の営為を洗い直し、それに基づいた真心を歌うことを目指します。子規や茂吉の近代短歌の伝統を保持し、精神の芯をなす、美しい言魂としての短歌を期待しています。

作品募集要項

趣旨●伝統の短歌を、源流に立ち返って基盤を確かめ、日本の四季の中で紡がれる生きる力としての三十一文字を称揚する。伝統を再構築し、新たな精神の拠り所とすると同時に、それらの作品を世に広め、残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの短歌作品。ただしこれまで同人雑誌・短歌誌に発表したものを改作したものも可。（これまで受賞した作品は不可）

応募資格●不問

応募規定●一人二首。（原稿用紙使用の場合も必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い縦30字×横20行で印字。別紙を添付のこと（レイアウト自由）。必ず閉じること。

別紙に①応募部門（2022年度第3回文芸思潮短歌賞応募作品と明記のこと／封筒にも）②本名およびペンネーム③それぞれふりがな④年齢・生年月日・男女性別⑤〒住所（郵便番号は必ず明記のこと）⑥電話番号⑦職業・略歴

※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取りコピーの方を送付のこと。

応募審査料●1000円（二首分）を応募封筒に郵便為替（何も書き込まないこと／郵便局で入手）で同封のこと。切手可。外国からは9USドル。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」短歌賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●文芸思潮短歌賞

最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金7万円（2名5万円／3名3万円）

※最優秀賞には書家による作品の料紙仮名書を特別賞として授与

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金2万円（4名以上は1万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●五十嵐勉・他（交渉中）

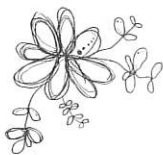
締切●2022年1月31日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2022年3月25日発売の「文芸思潮」83号に発表。

受賞発表・最優秀賞および優秀賞作品掲載は6月25日発売の84号に発表掲載。奨励賞なども「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 近代短歌の、自身と生命と生活を見つめる主体精神を大事にし、真の命の叙情を三十一文字の調べにする伝統の上に立った短歌作品を期待しています。美しい強い日本の言葉の深い泉にひたり、その清冽な水に触れさせてください。



第2回「文芸思潮」短歌賞

奨励賞

偽りの我が告白を疑はぬ瘦せたる友は降る雪の中

廣島佑亮

ひさ

1927年生まれ 94歳
沖縄在住
主婦

ひろしま ゆうすけ

1967年生まれ
会社員
第49回佐々木信綱頭
彰歌会三重県知事賞受賞

緋沙

一心に蟬鳴いており秋深く肌に冷え冷え風あたる朝